

ある作家

松本 功夫
木村 一郎
所 祥子

舞台、松本の部屋。小奇麗にしているが、人間味の無い、薄っぺらな感じ。

客入れ（音楽あり）

音楽、F.O.
照明、暗転

音楽
照明、ゆっくりと舞台全体
上手（玄関）から木村が登場

木村、さも自分の部屋かのように、余裕を持って部屋をらるつく
しばらく、休憩するかのように部屋にとどまってから、思いだつたように
立ち、下手側（寢室）に退場

音楽、F.O.

松本、上手から登場
ポケットから鍵やら、携帯やらを取り出し、テーブルに置いて、ソファに座る

松本 ……
…… 疲れた。
……

松本、上手側に一旦退場
同時に木村が登場
木村、上手側を見る

木村 ……（どうしよう？）

木村、松本が戻って来そうな気配を感じ、下手に退場
松本、飲み物（ペットボトル）を持って戻ってきて、ソファに座り、それを飲む
松本、大きく息を吐き

松本 疲れた。
：
どうしようかな。
うん、

松本、携帯を取り、しばらく色々見てから、電話する

松本 もしもし、俺だ。
何してる。
じゃあ、飲みに来ない。
そっか、明日早いのか。
そりや、きついな。
分かった。
いやいや、こつちこそ突然悪いな。
じゃあ、明日頑張つて。

松本 ：

松本 もしもし、俺だ。
この前ありがとう。
助かった。
お前、今日暇か。
マジか。
そっか。
いやいや、暇なら飲みに来ないかなつて。
良い良い。
大丈夫。
じゃあ、頑張れ。
また連絡するよ。
じゃあな。

松本 ：
みんな冷たいな。
俺寂しくなつちやうよ。
寂しくなつちやうよ。
寂しくなつちやうよ。
：
この独り言が一番寂しいな。

松本　　もしもし、ジョージ。
俺だ。
元気にしてるか。
はいはいはいはい。
お前暇だろ。
暇だよ。暇にしろよ。
飲みに来い。
俺暇なんだよ。
な。暇だろ。
来い。
おう、ありがとう。
じゃあ、ダッシュで来い。
ジョージ、ありがとうな。
大丈夫、大丈夫、何も買ってこなくて良いから。
ダッシュで来れば良いから。
電車の中も、その場でダッシュしてれば良いから。
分かった、分かった。
じゃあ、待ってるぞ。

今の台詞間に、木村登場している

松本　　よし、一人確保。
後は、誰呼ぼうかな。
暇そうな奴は。

木村、上手の方に移動し、出口付近で立ち止まり、松本を見る
松本、携帯を見ているが、予期せぬ何かの動く気配で、木村を見る
二人、目が合う。

松本　　∴
木村　　∴

松本、ソファーから立ちあがる

松本　　∴
木村　　∴ 誰。

木村、素早く上手に退場

松本 ・・
え。
どういふこと。
俺ん家だよね。
え、今の誰。
・・
警察。

松本、持っていた携帯で警察に電話しようとする
木村、包丁を持って登場

木村 ストップ。
松本 ・・
木村 そのままで。

木村、ゆつくりと松本に近づく

木村 動かないでくださいね。
言うこと聞いてくれたら、何もしませんから。

松本 ・・
木村 手、上げましょうか。

松本、手を上げる

木村 ありがとございませう。
携帯を。
変な動きしたら、刺しますよ。

松本 ・・
木村 言うこと聞いてくれたら、本当に何もしませんし、すぐに帰りますから。
ゆつくりと携帯を俺に差し出してください。
ゆつくりとです。

松本、ゆつくりと携帯を差し出す。
木村、包丁を向けながら、慎重に携帯を取る

木村 ありがとございませう。
録音とかしてないですよ。

松本 ・・ (頷く)
木村 良かったです。
楽にして良いですよ。

村上、包丁をおろす

松本 　　：
木村 　　僕のこと覚えてませんか。
松本 　　： (???)
木村 　　居酒屋、北のはずれ。
松本 　　： (わからない)

木村、変なアクセントで

木村 　　いらっしやいませ〜。
松本 　　あ〜〜。
木村 　　ありがとうございました〜。
松本 　　はいはいはい。
木村 　　辛いのは苦手です。
松本 　　北のはずれのタイ人だ。
木村 　　日本人です。
松本 　　え。
木村 　　僕日本人なんです。
松本 　　嘘。
木村 　　日本人です。
松本 　　タイ人だよ。
木村 　　日本人です。
松本 　　そのイントネーションはタイ人でしょ。
木村 　　この言い方は、単なる癖で。何か、緊張して。
緊張すると、いらっしやいませ〜ってなっちゃうんですよ。
松本 　　いやいやいや、なんないよ。
タイ人でしょ。
木村 　　そんなことないですつて。
本当に日本人なんですつて。
松本 　　いや〜、
て言うか、何でいんの。
そらだよ。
何でいるんだよ。
お前、こゝ俺ん家だぞ。
木村 　　僕、木村です。
松本 　　ああ、ごめん。
木村、こゝ俺ん家だぞ。
名前なんてどうだつて良いんだよ。
何でここにお前がいる、木村君がいるのかつてことが問題なんだよ。

木村　：はい。
松本　：
ええ、何で。
木村　つて偽名だろ。
木村　本名ですよ。
松本　下は。
木村　一郎です。
松本　偽名だよ。
木村　本名ですつて。
松本　木村一郎なんて、何か申し込む時の記入例だろ。
お前、日本に来て、最初に見た名前を名乗ってるだけだろ。
木村　本名だし、日本人ですつて。
松本　違うよ。
今話さなきゃいけないのは、そこじゃないんだけど、気になつてしょうがないんだよ。
北のはずれのタイ人が不法滞在で不法就労で、木村一郎と名乗っている。
出来すぎだろ。
木村　居酒屋つけないと、北のはずれの村にいる人みたいに聞こえます。
松本　うるせえよ。
木村　すみません。
松本　パスポート見せてみる。
木村　取ったことないです。
松本　ほら見る。
違う。
こんなこと話してる場合じゃない。
木村　何か、すみません。
松本　ちよつと落ち着いて良い。
木村　落ち着いてください。
松本　：
どこから入つた。
木村　玄関から。
松本　玄関。
木村　はい。
松本　どうやつて。
木村　鍵を開けて。
松本　ガチャつて。
木村　ガチャつて。
松本　：
木村　：
松本　何で。
木村　何でと言われましても。

松本 え 鍵は。

木村、ポケットから鍵を出して、見せる。

木村 あります。

松本 何で。

何であるの。

木村 あ、えくと、それは。

松本 お前おかしいだろ。

とりあえず携帯返せ。

松本、木村に歩み寄ろうとする

木村、包丁を松本に向ける

松本 ::

木村 ::

松本 分かった、分かった。

落ち着こう。

木村 ::

松本 落ち着こう。

木村 松本さんこそ、落ち着いてください。

松本 お前が落ちつけよ。

木村 じゃあ、下がってください。

松本 ::

松本、下がる

木村、確認して、包丁を下ろす

松本 目的は何なのかな。

何が目的で、俺の部屋に入ったのかな。

その鍵は、どうやって手に入れたのかな。

木村 ::ファン。

松本 ::ファン。

木村 はい。ファンです。

松本 それは、明菜ちゃんファンみたいな。

木村 はい。

松本 ファナティックの略の、ファン。

木村 ::はい。

松本 分かってないよな。

木村 ::

松本 …ええ、そんなことある。
そんなドラマ観たことあるけど、実際起る。

木村 話ししたいなって。

松本 は。

木村 話し、してみたいなって。

松本 北のはずれですれば良いじゃん。

木村 いつもべろべろなんで。

松本 確かに。

木村 だから、一回ちゃんと話してみたいと思って。
今日は下見に来てたんですけど、帰って来ちゃったんで、もうペンニックで。
すみません。

松本 下見の意味が分かんないよ。

木村 今までも、何回か下見には来てたんですけど

松本 何回下見するんだよ。

木村 緊張すると上手く喋れないんで、慣れようよ。

松本 そうなんだ。
何回か来てたの。

木村 あ、はい。

松本 こわっ。え、こわっ。え、マジで、こわっ。

木村 僕もさつき怖かったです。
突然、人が入ってきて。
誰っ、て。

松本 俺に浴まつてんじゃん、俺ん家だもん。
お前がいる方がおかしいんだから。

木村 はい。

松本 ちなみに、何回位ここ来てんの。

木村 そうですね、かれこれ、2、3、0回位ですかね。

松本 多いよ。多過ぎだよ。
びっくりだよ。
：

木村 洗い物してくれてた。

木村 あ、何回かは。

松本 あったわ。そういやあるわ、記憶にない洗い物。
酔ってやってたんだらうなって、軽く思ってたけど。

木村 台本の締め切りで忙しいんだらうなって。

松本 なるほどね。
ありがとうね。

木村 いや、お役に立ててるのであれば光栄です。

松本 感謝してねえよ。
いや、してるよ。

もしかして、掃除もしてくれてた。

木村 ああ、気付きました。

松本 今な。

今気付いたよ。

そう言えば、最近、俺の部屋、そこそこ綺麗になつて。

自分で掃除した記憶あんまりないけど、そこそこ綺麗になつて。

木村 良かったです。

松本 良くはないよ。

良いけど、良くないよ。

木村 …すみません。

松本 いやいやいや。

：

鍵はどうしたの。

木村 あ、えっと

松本 俺、酔つて、渡したりした。

木村 そんなことないです。

松本 だよな。

ほっとしたわ。

酔つて、俺から渡したらどうしようかと思つた。

木村 確かに、松本さんが酔つてた時なんですけど

僕が勝手に型を取つて、合鍵作りしました。

松本 すぎえな。

完全に犯罪だよ。

木村 つい。

松本 「つい」で済むレベルじゃないけどね。

木村 今度から洗濯もすれば良いですか。

松本 勝手に入るなよ。

木村 あ。

松本 当たり前だろ。

勝手に入つてることが一番の問題なんだよ。

木村 …

松本 金は。

木村 金。

別にいらないます。好きでやったことなんで。

松本 そつちじゃねえよ。

なんで俺が、お前がやった家事に対して報酬払わなきゃいけないんだよ。

金とかは盗んでないだろうなつてことだよ。

木村 まさか。

僕のこと泥棒だと思つてるんですか。

松本 もつと夕子悪いんだよ。

木村 僕は松本さんのファンなんです。
松本 分かったから。
木村 僕、松本さんのファンだから、ただ役に立ちたくて
松本 分かったから。
それはありがとう。掃除もありがとう。
でも、鍵は返せ。

木村 ∴
松本 鍵は返せよ。
木村 ∴
松本 別に金も盗んでないみたいだし、
警察にも連絡しないから、黙って鍵を返せ。
そして、一度と勝手に入るな。
そうしたら、何もなかったことにしてやるから。

木村 ∴
松本 な。
木村 ∴
松本 な。
木村 ∴
松本 な。
木村 ∴

木村、渋々鍵を返す

松本 携帯もだよ。
警察には連絡しないから。
木村 ∴

木村、携帯を返す

松本 じゃあ、後は、このまま静かに帰れ。
包丁は、あつた所に返しとけ。
木村 話は。
松本 今度、べろべろになる前に、北のはずれに行くから。
木村 本当ですか。
松本 本当だつて。
木村 ∴わかりました。
本当に、驚かせてすみませんでした。
松本 確かに驚いたけど、悪意はないみたいだし、お互いね、これで何もなかったことに。
木村 ∴はい。
松本 じゃあ。

松本、出ていくことを促す

木村 ::

松本 じゃあ。

木村 ::

松本 じゃあ。

木村、退場しようとする。が、立ち止まって

木村 もし松本さんが、良いつて言えば、また来て良いんですね。

松本 ないけどな。

木村 そうですよ。

木村、一人何かに納得したかのように頷き、退場しようとする

松本 お前、鍵持ってるね。

そうだよ。型作ったんなら、鍵作り放題じゃねえかよ。

木村 そんなことないです。

松本 ちょっと待て、これ。

松本、木村に包丁を向ける

松本 ::

木村 ::

信用できません。

松本 こっちの台詞だよ。

木村 多分、もう一度と、店に来る気ないですよ。

松本 行くつて。

木村 いや。

松本 行くつて。

木村 いや、来ないでしょ。

松本 絶対行くつて。

木村 お話しましょう。

松本 は。

木村 今日、お話しましょう。

松本 いやいやいや、

s.e. ピンポーン

木村 誰だ。(玄關の方に)
松本 もはやお前の家だな。
木村 誰ですか。
松本 ジョージだよ。
木村 ジョージ。
松本 さっき飲もうって電話してたから。
聞いてたぞ。
木村 どの国の人ですか。
松本 日本人だよ。
木村 嘘だ。
松本 お前が言うなよ。
木村 ジョージが日本人なはずが(ない)。
松本 劇団員だから。
木村 ∴
松本 劇団員で、ジョージって呼ばれてるやつがいるんだよ。
木村 ∴
松本 本当だつて。
タイ人に、アメリカ人につて、どんな状況なるんだよ。
木村 アメリカ人なんですか。
松本 日本人だよ。

s.e. ピンポン連打

松本 ほら、開けないと。

松本、玄關に行こうとする

木村、止める

木村 一緒に逃げる気だろ。
松本 なんで俺が逃げるんだよ。
木村 僕、開けてくる。
松本さん、待て。
松本 いや、でもさ、
木村 大丈夫。
松本 いや、
木村 大丈夫。
大丈夫。
大丈夫。

s.e. ピンポン連打

木村 はい、ただいま、お伺いします。

木村、玄関に行く

松本 店か。

松本、ソファに座る、立つ、うろろろする、座る

松本 落ち着こう。

俺動揺してる。

落ち着こう。

何なんだ。

どういうことだ。

ありがちだけど、実際あるか。

最後殺されたりする感じが。

段々、あのタイ人が狂気じみて、俺が追い詰められて。

マジかよ。

松本、立ち上がり周りを見渡す

松本 武器になりそうなものは。

::

何もねえよ。

木村、所 和気あいあいと、喋りながら登場

松本、なんとなく急ぎ気味にソファに座る

所 え、そうなんですか。

木村 そうなんですよ。

所 信じられないです。

木村 いや、本当に。

所 え、私は絶対無理です。

木村 大丈夫だって、抵抗あるの一瞬だけだから。

松本 めっちゃ馴染んでるし。

木村 食って、びつくり。

エビみたいな味なんだよね。

所 コオロギですよ。

木村 エビみたいっていうか、あれはもう、エビだね。

松本 何の話してんの。

木村 　　∴
セミもいけるんだよ。
所　　え、無理無理無理。
松本　　ごめんごめん。
所　　あ、おはようございます。
松本　　ああ、おはよう。
　　∴
所　　えくと、∴初対面だよな。
所　　はい。
松本　　何で。
所　　え。何がですか。
松本　　何でそんな馴染んでんの。
　　ていうか、何でそんな風な会話になるの。
　　出会って、数秒で昆虫の味の話っておかしくない。
木村　　あく、それは。
　　何か、僕が玄関開けたら、彼女がいて。
所　　お疲れ様です。
木村　　僕は面食らってたんですけど、そしたら彼女が。
所　　虫みたいですね。
木村　　って僕に言ったんです。
松本　　ジョージ、すげえな。
木村　　で、僕が、え、何の虫ですかって。
松本　　そのリアクションで良いのかな。
所　　で、私が、コオロギかな。
松本　　黒いから。
木村　　あく、それで。
松本　　気付けよ。
木村　　で、僕が、
　　えくと、ジョージさんですか。
所　　はい。ジョージです。
　　コオロギさんですか。
木村　　∴はい。コオロギです。
松本　　何で認めたの。
木村　　松本さん、待ってますよ。
所　　コオロギさんも、今日は一緒に飲むんですね。
木村　　そうですね。
　　どうぞ。
所　　お邪魔します。
木村　　いや、黒だったら、ゴキブリって選択肢もあつたんじゃないですかね。
所　　私、ゴキブリ嫌いなんで。

木村 なるほど。
そう言えば、ゴキブリは分からないけど、コオロギってうまいんだよね。

所 え、そうなんですか。

木村 そうなんですよ。

所 信じられないです。

木村 いや、本当に。

所 え、私は絶対無理です。

木村 大丈夫だって、抵抗あるの一瞬だけだから。
食って、びっくり。
エビみたいな味なんだよね。

所 コオロギですよ。

木村 エビみたいっていうか、あれはもう、エビだね。

松本 なってる、なってる。
確かにさっきの会話になってる。
出会って、数秒で、昆虫の味の話になってる。

木村 セミもいけるんだよ。

所 え、無理無理無理。

木村 セミもね、エビ。
でもね、幼虫は、びっくり、ナッツ。
クルミみたいな感じかな。

所 何でそんなに詳しいんですか。

木村 え、それはちよつと言いたくないかな。

所 え、何ですか。
気になるじゃないですか。

木村 いや、でもなく。

所 コオロギさん。

松本 ごめん、ごめん、ごめん。
続けるの。

木村 ∴

所 ∴

松本 再現して、更に続いていくの。
俺、入っていけない感じだけど、続けるの。

木村 だって、気になってますよね。

所 何がですか。

木村 僕の昆虫食のルーツみたいなこと。

所 ∴そうでもないですね。

木村 え。そうなんですか。

所 別に私、虫食いたいとは思わないんで。

松本 なんだろう、二人のコミエ力が高すぎるのか、結局意味ないし。

木村 ∴

所 ところで、松本さんとゴオリギさんは、どんな関係なんですか。

松本 ジョージがおかしいんだ。
こんな感じになってるの、ジョージがおかしいんだな。

木村 僕がストーカーで、松本さんがストーカーされてる人ですね。

松本 お前もおかしい。

所 ……、すごい。

松本 リアクションが貧困だな。
おかしいでしょ。ジョージ、おかしいでしょ。
良く考えてみて。

所 ……

え、すごくないですか。
これって、ヤバい話ですよ。
すごくないですか。

松本 待て待て待て、止める。
俺さ、すごいとか、やばいとかの多様性苦手なんだよ。
いつも言ってるだろ。
言葉つてものをき、もう少し、きちんと考えよ。

木村 でも、酔ってるとき、松本さん、すごいとやばいしか使ってないですよ。

所 分かります。

松本 そんな事ねえよ。

木村 たまに、ぶりますよね。

所 あ、ぶりますね。

松本 うるせえよ。
良いだろ、別に。作家だから良いじゃねえかよ。
別に作家ぶつたって問題ないだろ。

木村 別に作家ぶってるって言ったわけじゃないんですけどね。
ね。

所 ね。

松本 腹立つな。
お前は単なる犯罪者だからな。ストーカーは犯罪だからな。
俺がさつき、せつかく何もなかったことに（してやるとか言っただけに）

所 私、初めて見ました。
ストーカー、初めて見ました。

松本 俺もだよ。

木村 僕だって初めてですよ。

松本 お前が言うなよ。

木村 そもそも、今までストーカーなんてしたことないですから。

所 そうやって考えると、今、すごい状況なんですね。

松本 さつきもそう言っただけだろが。
何でそんな楽しそうにしてんだよ。

木村 まあまあまあ、いつまでも立ち話も何なんで、もう座って飲みましょうよ。

松本 お前は帰れよ。

木村 ∴

松本 当たり前だろ。

木村 ∴

松本 鳩でもしないぞ、そんな顔。

所 本当だ。コオロギさん、鳩にも似てますね。

木村 え、そうですか。

松本 何で嬉しそうなの。

木村 いや、大体タイ人とかしか言われないから、なんか、嬉しくて。

松本 人じゃなくなっただけだな。

コオロギだぞ。ハトだぞ。まだタイの方が良いんじゃないか。

そうだよ。

喋りが普通になってるよな。

木村 ∴

松本 さっきと全然違うもん。

めっちゃ普通に喋ってるし

木村 リラックスできてるのかな。

松本 いやいやいや。

ぶってるよね。

お前の方が普段、タイ人ぶってるよね。

木村 そんなことはありませんよ。

そもそも日本人ですし。

松本 こすいな。

木村 何ですか。

松本 こすいなく。

木村 なんですとか。

松本 店にいる時はタイ人やって、いい感じで弄られて、女の前では、めっちゃ普通。

え、タイ人じゃなかったんですか。

木村 最初から日本人って言ってるじゃないですか。

松本 こすいでしょ。

木村 そんなことはないですよ。

本当に緊張すると

松本 ていうか、ジョーシの事狙ってる。

木村 そんなことはないですよ。

松本 良いって、良いって。

木村 違いますって。

松本 やるなく。

姑息な女好きだな。

木村 だから違いますって。

松本　　でもさ、俺思っただけど、姑息は駄目よ。
人間性つてのはさ、出ちやうんだよ。
俺は姑息な人間です。つて出ちやうんだよ。
そして、その姑息さから、お前の下品さが出ちやうんだよ。
確かに、人は元々下品なものなんだけど、その下品さは、哲学的なものじゃなきゃいけないわけよ。
甘く切ない下品さじゃなきゃいけないわけよ。
そう思わない。

木村　　でも僕本当に、
松本　　うんこ。
木村　　：
松本　　うんこ。
木村　　：
松本　　どうよ。
木村　　ちよつとわからないですけど。
松本　　俺の「うんこ」は哲学的で甘美だろ。
俺の「うんこ」は甘く切ないだろ。
木村　　ちよつとわかんないですけど。
松本　　言ってみろ。
木村　　え。
松本　　うんこ言ってみろ。
木村　　え。
松本　　言えつて。
お前のうんこが、どれだけ哲学的なのか、若しくは、ただのこすいうんこなのか、俺が聞いてやるから。
木村　　いや、でも
松本　　言えつて。
木村　　：うんこ
松本　　こすいな。くせえな。こすくせえよ。お前のうんこはこすくせえよ。
木村　　：
松本　　うんこ。
どうだよ。
俺のうんこどうよ。

木村　　：
松本　　ジョージ、言ってみろ。
所　　：
松本　　ジョージ。
所　　うんこ。
松本　　もう一回。
所　　うんこ。

松本 もう一回。
所 うんこ。
松本 ラスト。
所 うんこ。
松本 オッケー。
どうだ。
木村 分からないです。
松本 ジョージの魂から漏れ出た、うんこに触れただろ。
切実な叫びが聞こえただろ。
木村 なんか、微妙に嫌な気分になってます。
松本 うんこ。
どうよ。
まるで、老いた作曲家が、国を憂いて書いた、最後の交響曲のように壮大で哲学的だと
思わないか。
木村 うんこは、音符だとしても言いたいんですか。
松本 違うよ。
分かってないな。
分かってない、分かってない、分かってないな。
こすいんだよ。
そういう短絡的な思考がこすいつて言ってるんだよ。
木村 ∴

所 木村をかばう

所 やめてください。
松本 どうしたジョージ。
所 コオロギさん、かわいそうじゃないですか。
松本 え、何で。
所 だから嫌われるんですよ。
松本 え。
所 だから、みんなに嫌われてるんですよ。
松本 え。
所 だから、嫌われてるの。
松本 ∴
所 コオロギさん、あんまり気にしないでくださいね。
松本さん、悪気はないんです。
つつい自分の世界に入っちゃって、周りの気持ちとか考えられなくなっちゃってます。
松本 ちよつといいかな。
木村 大丈夫です。
僕、気にしてないです。

松本 え。いや、あの、
所 さっきも、先輩たちと集まって、飲んで喋ってたんですけど、みんな、本当に松本さんのそういうと二嫌いだって話で、超盛り上がってたんですよ。哲学がどうだとか言いながら、お前が一番下衆だつたの。コオロギさんもそう思ったでしょ。

木村 いや、ぼくはそんなに、
所 遠慮しなくて良いんですよ。みんな思ってるんですから。

木村 いや、
所 大丈夫ですつて。本当に、超盛り上がってたんですから。松本さんの二が嫌い山手線ゲームしたら、ずっと回り続けてたんですから。ずっとですよ。ずっと内回りだよ。私外回りに乗りたいんだけど、降りられない、みたいな感じで。やばくないですか。

松本 俺つて、そんなに嫌われてるんだ。
所 ∴

松本 俺つて、そんなに嫌われてるんだ。
所 そうでした、松本さんの家に移ったんですよ。

松本 ひょっとして、さっき飲んだ先輩たちつて、ゴリラーマンとミスチルとかかな。
所 何で分かったんですか。

松本 お前の前に、俺が飲もうつて誘った二人だよ。
所 他にもいましたけど。

松本 ゴリラーマンつて喋るんだ。
所 めっちゃ喋ってましたよ。

松本 いつも無口だから、ゴリラーマンつて呼んでたのに、そんなに喋るなら、ゴリラーマンでも何でも無いじゃん。ただの村上じゃん。
所 私は村上さんつて、ずっと呼んでますけど。

松本 そっか、俺つて、そんなに嫌われてたんだ。
所 いや、あの、

松本 俺つて、そんなに嫌われてたのか。
木村 僕はファンです。
松本 お前は黙ってる。
所 松本さん、さっきのは全部嘘なんです。

松本 ∴

木村 さすがにそれは無理があると思いますけど。
所 信じてもらえないかもしれないんですけど、全部嘘なんです。私、実は作家志望で、妄想癖があつて、

松本 　　：
所　　そう言えば、ここに来る途中、見知らぬ下駄を履いたおじさんに出会って、そのカラン
コロンって音を聞いてたら、ふっと身体の力が抜けて、一瞬記憶が途絶えていた時間が
あったなあ。
きっとその時に私は私の記憶を捏造されたに違いない。

松本 　　：
所　　最近、私はマーベル映画に凝っていて、マルチベースという世界観に興味があります。

松本 　　：
木村　だから何って話ですよ。
所　　信してもらえないかもしれないですけど、全部嘘なんです。
松本　信じられるわけねえだろ。
所　　ですよ。
すみません、つい。
松本　つい何。
つい人を傷つけても、狙って傷つけても、俺にとって傷は傷。
一応聞くけど、つい何なのかな。

所　　さっきのうんこの件で、昨日の稽古を思い出してしまつて。
私は見て面白かつたんですが、
聖子ちゃん先輩がやってて辛かつたつて。
それを思い出してしまつて。

松本　聖子ちゃんも飲みにいたんだ。
木村　聖子ちゃんもあだ名ですか。
所　　神田ひろみさんです。
木村　あの人か。
男ですよ。

松本　劇団入りしたいって来た時、聖子ちゃんカットだったんだよね。
木村　名前由来じゃないんですね。
松本　男で、あんな見事な聖子ちゃんカットは、初めて見たよ。
で、聖子ちゃんはうんこ連呼してたのが辛かつたんだ。

所　　そう言っていました。
松本　でも、上手くなったでしょ。
所　　はい。
松本　上手くなったよね。
所　　上手くなりました。
松本　だよ。

所　　最後は、聖子ちゃん先輩にぴったりな、毎朝駅で見かける女性が気になるけど、声を掛
けることができない。そんなしおらしいうんこになってました。

松本　だろ。
そうだろ。
そうだよな。

それなのに、お前らは、集まって俺の悪口を言い合ってたわけだ。

それだけじゃない。

俺が飲み誘いの電話を掛けた時に、みんな一緒にいたのにも関わらず、それを一切俺に告げず、さも、それぞれが違う場所にて、違う用事がある様なことを言っただけだ。

木村 酷いですね。

松本 お前は口を挟まなくて良い。

木村 ∴

松本 ショックだよ。

さすがに俺もショックだよ。

あいた口が塞がらないよ。(口は閉じてる)

∴

木村 突っ込むべきなんじゃないか。

松本 ただの慣用句だよ。

フリじゃねえよ。

強いて言えば、心の口が塞がらない位で思ってくれ。

木村 それは、作家としては、いさかダサいのでは。

松本 分かってるよ。

言ってから、あ、失敗したって思ったよ。

木村 ∴

松本 ∴

所 後もう一つ、みんな不満に思ってるところがあつて。

木村 めつちや塩塗りますね。

所 この際だから、言った方が良くなつて。

木村 無謀じゃないですか。

松本 聞きたくねえよ。

木村 ですよね。

所 じゃあ、やめときます。

松本 言えよ。

言ってくれよ。

聞きたくないけど、気になるだろ。

稽古場で、お前たちを見る度に、気になつちやうだろ。

嫌いなことは知ってるけど、何が嫌いかはわからない。

ひよつとして今の物言い。今の態度。

あく〜。

お前らの視線が怖い。

木村 めつちや繊細ですね。

松本 繊細だよ。

作家なんだもん、繊細に決まってるじゃん。

人一倍器が小さくて、ビビりなんだよ。

虚栄心の塊なんだよ。

悪いかよ。

木村 悪いと言うよりは、不憫に思っています。

所 言っても良いですか。

松本 言ってくれ。

所 ::

でもな。

松本 ジョージ。

木村 性格悪いですね。

所 本当に言っていていいですか。

松本 言ってくれ。

所 ::

松本 ::

間に耐えられない。

所、嫌な笑顔

木村 悪い顔してますね。

松本 ジョージ、お願いだ。

一思いに言ってくれ。

木村 松本さん、大丈夫ですか。

松本 大丈夫じゃねえよ。

恋した時ですら感じたことのない、心臓の拍動が激しいよ。

氷水に手を突っ込んだ時のように、手足が痺れてるよ。

木村 木村さん、いちいち文章が格好悪いです。

松本 分かってるよ。

それくらい動揺してるってことだよ。

俺を責めるな。

もつと動揺するだろ。

木村 あゝ、器が小さい。

松本 ジョージ、言ってくれ。

所 ::

松本 ::

所 発表します。

松本 ::

所 あた名がダサい。

松本 ::

木村 ::

松本 そんなことはないだろ。

所 ダサいですよ。

松本 どころが。

所 私なんてジョージですよ。

木村 ジョージさんは、何でジョージさんなんですか。

松本 ジョージ良いじゃねえかよ。

所 良くないですよ。

私、所祥子って名前なんですけど、
祥子は、由紀さおりと安田祥子の祥子なんですよ。

木村 すごい説明ですね。

分かる自分が悔しいですけど。

所 で、苗字が所だから、祥子の子を「し」って読むと、所しよりし、所ジョージ、ジョー
ジってなったわけですよ。

酷くないですか。

木村 まあ。

松本 何で。

ジョージ、良いと思わない。発想が素晴らしい。

木村 まあ。

でも、本人が気に入ってないみたいなんでね。

松本 何で。

良いじゃん。

そもそも所ジョージから来てんだよ。

それって凄いいことじゃねえ。

光栄じゃん。

木村 それは確かにそうですね。

所 私、女の子ですよ。

松本 え、じゃあ、所ジョージ嫌い。

所 そんなことはないですけど。

松本 じゃあ、良いじゃん。

所 ∴ (不満そうな顔)

松本 なんだよ、その顔は。

所 コオロギさんだつて、自分がコオロギさんって呼ばれるの嫌でしょ。

松本 それは、お前が付けたんだろ。

所 は。

松本 「は」じゃねえよ。

お前が付けたら。

所 そんなことないですよ。

松本 お前だよ。

所 違います。

そんなわけないじゃないですか。

そんなダサいあだ名、私は付けません。

私だったら、もつとお洒落なあだ名付けます。

松本 どんなんだよ。
所 ∴
そうだな、かりんとう。
松本 もっと酷いだろ。
木村 それも中々良いですね。
所 でしょ。
松本 そんなことないよ。
とにかく、コオロギも、今みたいな感じで、出会って、数秒で、お前が付けたあだ名だ
から。
なあ。
木村 そうですね。
松本 ほら。
所 え、そうでしたっけ。
松本 そうだよ。
所 全然記憶にない。
木村 僕は結構気に入ってますけどね。
所 ほら。
松本 何がほらだよ。
お前、コオロギは、自分でダサいって言ってたからな。
所 本人が気に入ってるんだから良いじゃないですか。
ね。コオロギさん。
木村 はい。僕は結構気に入ってます。
所 ∴ (ドヤ顔)
松本 何だよ、その顔は。
∴
コオロギ。
木村 何ですか。(怒る)
松本 何で怒るんだよ。
木村 松本さんに言われると、腹が立ちます。
松本 ほらほらほら。
ジョージ、これがどういう事が分かるか。
所 何ですか。
松本 分からないだろ。
お前には分からないだろ。
良いか。
こいつは、コオロギってあだ名が気に入ってるわけじゃないんだよ。
所 何だっけ良いんだよ。
∴
分からないかな。
所 本人は気に入ってるってさっき言ってたじゃないですか。

松本 違っただな。
それはまったくもって違っただな。
さつきも言つてたけど、そいつは姑息な女好きだ。

木村 そんなことありませんよ。

松本 さらに、超緊張しい。
お前のようにぐいぐい来る女にはめつぼう弱い。

所 そんなことありませんよ。
純粋にコオロギさんつてあだ名が気に入ってくれたんですよ。

松本 じゃあ、証明して見せよう。
これから交互にこいつの事を呼んでみよう。
俺が言つてることが理解できるはずだ。

所 良いですよ。

松本 お前もいいな。

木村 大丈夫です。

松本 良し、じゃあ、ジョージお前から、呼んでみる。

所 はい。
コオロギさん。

木村 はい。

松本 コオロギ。

木村 何ですか。

所 コオロギさん。

木村 はい。

松本 コオロギ。

木村 何ですか。

所 コオロギさん。

木村 はい。

松本 コオロギ。

木村 だから何ですか。

所 コオロギさん。

木村 はい。

松本 コオロギ。

木村 てめえ、殺すぞ。

松本 ジョージ、分かったか。

所 ∴

木村 俺は一体。
松本さんになんてことを。

松本 大丈夫だ。
別にそんなに、落ち込むことはない。
世の男どもにはよくある話だ。
俺は、これを、キヤバクラシンドロームと呼んでいる。

木村 キヤバクラシンドローム。

松本 矛盾こそが産む、耽美な世界とでも言えればいいのか。
ちよつとだけ虐められたい。怒られたい。でも俺の方が優位性。みたいな感じか。
：
お前のあだ名が気に入ってたわけじゃないんだよ。

所 ；（悔しそうな顔）
でも、松本さんが付けるあだ名だつてダサいです。

松本 そんなことねえよ。

所 ダサいですよ。

松本 そんなことねえよ。

所 ダサいです。

松本 大体誰がそんなこと言つてんだよ。

所 全員です。

松本 ；全員。
ぜ、全員。
全員言つてるの。

所 はい。

松本 全員。

所 はい。
しかも、古い。

松本 ；
何で。

所 なんか、古くないですか。

松本 ；
古いは駄目だろ。
古いは駄目だよ。
お前らだつて、山手線ゲームしてたろ。

所 それは、先輩たちが古い時代の人間なんで。

木村 ずっと回るつて、やばいですよね。

松本 掘り返すな。
ようやく立ち直つてきてたんだから。

木村 繊細ですもんね。

松本 え、そうなの。
聖子ちゃんも、ゴリラーマンも、ミスチルも、良いじゃん。

木村 他にどんなのあるんですか。

所 純恋歌さん。

木村 絶対、長瀬の方だ。
所 ビッグ・スリーさん。
木村 一人ですよ。
所 あとは、夜鷹死苦くん。
木村 漢字なのかな。
所 ええと、後は、肩バットさん。長い曲名さん。整理券さん。
木村 最後の方、やばいですね。
所 まあ、もつといるんですけど。
木村 それって、あくまであだ名で、芸名じゃないんですよ。
所 そうですね。
松本 そりやそらだろ。
あくまでも、芸人としての誰誰つてのを演じるつて言うか、芸人の誰々つていうアイデ
ンティティのための芸名であつて、あだ名とは違ふだろ。
木村 その通りです。
松本 ええ、俺は、良いと思うんだけどなく。
木村 あれですよ、良いか悪いかつてもありますけど、なんか、寄ってますよね。
松本 そうかな。
所 大体、今、時代はあだ名禁止ですよ。
松本 そんなことは、どうでもいいよ。
そもそも時代に抗うことは、俺らの存在意義でもあるだろ。
木村 スケールが小さいですね。
松本 それに、あれは小学校とかの話だろ。
くそみたいな話だよ。
木村 良い大人が、あだ名が、長い曲名つてのもかわいそうな気もしますが。
松本 俺はできるだけ、お前らにあだ名付けるし、できるだけ、さん付けしない。
木村 努力目標だ。
松本 それよりもだ。
それよりも重大なことを、お前は言つてたからな。
もう駄目だ俺。
木村 松本さん。
松本 ∴
もう良い。
木村 ∴
松本さん。
所 私、そんな酷いこと言つてましたかね。
木村 比較的、ずつと言つてますよ。
所 ∴
何が駄目だつたんですかね。
木村 ∴
松本 古いは駄目だろ。

木村 　　：
松本 　　古い駄目だつて。
所 　　　：
木村 　　大丈夫ですか。
松本 　　大丈夫じゃねえよ。
木村 　　：
所 　　　：
木村 　　謝った方が良いんじゃないですか。
所 　　　ええ、私ですか。
木村 　　そりやそうでしょ。
松本 　　やつぱりさ、俺はもう駄目なのかもしれない。
木村 　　松本さん。
松本 　　自信が無いんだよ。
　　　　　　ダサいのもさ、正直ショックだよ。
　　　　　　でもさ、それは結構、人それぞれの感じ方にも左右するじゃない。
　　　　　　ダサいけど格好いい。とか、逆に良いとこ付いてるよね。とかぞ。
　　　　　　まあ、今の「逆に」つて言い方は、俺はイラつとするとこがあるんだけどぞ。
　　　　　　でもさ、古いはさ。
　　　　　　古いは駄目だよな。
　　　　　　世界が物凄いスピードで変わってるのか、世界はほとんど変わっていないのか。
　　　　　　どっちだと思う。
木村 　　僕ですか。
松本 　　お前。
木村 　　…ものすごいスピードで変わってるんじゃないですか。
松本 　　ジョージ。
所 　　　私もゴオロギさんと同じです。
松本 　　だろ。
　　　　　　そうだろ。
　　　　　　みんなそう思ってるのよ。
　　　　　　でも俺はさ、ほとんど変わってないような気がしちやうわけよ。
　　　　　　それは、俺が単にいきて、人と違なんだつて思いたいだけなのか。
　　　　　　それとも、俺の思考が、感性が、どこかで止まってしまっただけなのか。
　　　　　　それとも、周りの人が思っているようなこと、感じているようなことを、俺は同じ空間、
　　　　　　ベクトルで考えられなくなってるだけなのか。
　　　　　　…
　　　　　　何だよ。
　　　　　　急に真面目なこと言ってる。
　　　　　　ちよつと引く、みたいな顔やめる。
所 　　　実際、ちよつと驚きました。
木村 　　劇団では、そういう話しないんですか。

所 　　しないですね。

木村 　　そうなんです。

松本 　　自信が持てなくなるんだよ。
古いはさ、自信がなくなるんだよ。

木村 　　気にしすぎですよ。

松本 　　そうかもしれないけど、そういうお年頃なのよ。
俺は今、まさにそういうお年頃なのよ。
ああ、もう良いよ。
独り言だよ。
記憶に残さないでくれ。

木村 　　：

所 　　：

木村 　　謝った方が良いですよ。

所 　　でも、今更古くないって言っても、信してもらえないですよ。

木村 　　そりやそうでしょ。
なんか、うまいことフオロした方が良いですよ。
仮にも、松本さんを尊敬して劇団に入ったわけですよ。

所 　　もちろんです。

木村 　　だったら。
何かあるでしょ。

所 　　：

松本 　　もう良い。
そうだよ。
飲もう。な、飲もう。

木村 　　目が死んじゃってますよ。

所 　　：

松本 　　立ち話も何だから、座って飲もう。いや俺は座っては飲まない。
走りながら飲もう。
きつとその方が、世界がぐらぐらぐらぐら揺れて、自分の足が地についているのか、それとも天についているのか。
飲んで、飲んで、そして最後には、共に地に落ちよう。そもそも天に人は存在しないのだから。

木村 　　やばいですよ。
なんか言ってください。

所 　　：

松本 　　松本さん、私を抱いてください。

松本 　　：

木村 　　何で。

所 　　作家さんって、女を抱くと、元気になるんじゃないんですか。

木村 　　そんなことはないでしょ。

所 一石二鳥かなど。
木村 何が。
松本 ジョージ、今何て言った。
所 私を抱いてください。
松本 何で。
所 松本さんは、女を抱くと元気になるんじゃないんですか。
松本 …え、それは元気だから、女を抱きたくなるっていうか、まあ、確かに狙った女を抱くと、精神的にはめっちゃ元気っていうか、確かに女を抱くと元気になるのかなあ…
木村 松本さん。
松本 違う違う。
何で、俺がジョージ抱かなきゃいけないんだよ。
所 え、でも先輩たちは、松本さんは女癖が悪いって。
木村 それは昔の話だ。
松本 何でお前が答えてるの。
所 劇団員、客演、とにかく関係する女、結構抱くつて。
松本 結構、抱くつて。生々しいから。
木村 それも昔の話だ。
松本 だから、何でお前答えるんだよ。
所 私を抱いてください。
松本 やだよ。
所 なんです。
木村 松本さんは、そういうのが苦手なんだよ。
松本さんは、目の前にあるものを食うんじゃないで、食いたいものしか食わないタイプなんだよ。
所 どういうことですか。
木村 結局何言ってるの？って感じの、くどい話して、なんとなく自分の事を凄いつて思わせから、じゃあつてのが好きなんだよ。
松本 なんか俺、凄いい格好悪い。
所 私だつて、松本さんの事、凄いつて思ってますよ。
木村 後、さらに言えば、松本さんは、綺麗系が好きなんだよ。
サブカルじゃなくて、正統派が好きなんだよ。
ね。
松本 何で知ってたんだよ。
いや、一概にそうじゃないけどね。
木村 確かに、そうじゃない奴もたまにはいた。
松本 そうだろ。つて、何で知ってたんだよ。
お前何なんだよ。
木村 俺はストーカーです。
松本 ……
木村 ……

松本 ストーカーって怖いな。
木村 ……すみません。
松本 ……
木村 この際だから言わせてもらうけどさ、お前の抱いてくださいって、下心だろ。
所 どういうことですか。
木村 今日の会話の流れで、お前はここに来る前、先輩たちと飲んでたんだろ。
所 そうですよ。
木村 先輩たちは断つたのに、お前だけは、松本さんの誘いに乗った。
所 はい。
木村 先輩たちには、それは言ってきたのか。
所 どういうことですか。
木村 先輩たちには、松本さんと飲むことを言ってきたのか。
所 ……もちろん。
木村 嘘だな。
所 ……
木村 本当に松本さんと飲むって言ってきたのか。
所 黙ってきました。
木村 だろ。
所 別に良いじゃないですか。
木村 ああ、別に良いよ。
所 でもそれは何でだ。
木村 せつかく松本さんが誘ってくれたからです。
木村 今までに松本さんに誘われたことは。
所 ありますよ。
木村 それはある程度の人数でだよな。
所 一人だけで誘われたことは。
松本 何だろ、事件解決する感じ。
木村 ……ジョーシさん、あなたが単独で誘われたことは。
所 ……ありません。
木村 それなら、今日、みんなで飲んでるところから、うまく抜け出せば、あなたは周りを出し抜いて、松本さんと二人で飲むことができる。
所 そう思っただんじゃないですか。
松本 そんなことありませんよ。
木村 ストーカーだよな。刑事さんじゃないよね。
所 で、ここからは私の推測です。
木村 あなたはまだ、そんなに良い役を貰えるような役者さんじゃないんじゃないですか。
所 なんでわかるんですか。
木村 会話の空気の読めなさで、ピンとききました。
松本さんが普段、どんな台詞を書いていると思いますか。
所 こう見えて、繊細な言葉遣いとそこに纏わせる空気を大事にする台詞だ。

松本 それは褒めてるの。
木村 松本さんは黙ってて。
松本 すみません。
木村 そう思いませんか。
所 そう思います。
あめ見えて、とても羨敵な台詞を書きます。
木村 そんな台詞を、あなたはメインクラスの役で読みたかった。
所 それは私だけじゃなく、劇団員なら誰だってそう思っています。
木村 ええ、そうです。
私も劇団員ならそう思うでしょう。
ですが、今のあなたは、まだ力不足だ。
所 そんなことはありません。
チャンスさえあれば。
木村 あなた、先ほど、こんなことを言っていましたね。
一石二鳥かなど。
所 ∴
木村 それはどういう意味ですか。
所 ∴特に意味はありませんよ。
木村 一つの言葉でお互いが得する。
松本さんに抱かれれば、あなたは良い役を貰える。
所 ∴
松本 俺、そんなことで役やんないよ。
木村 良くある話です。
松本 無いから。
木村 あつたじゃないですか。
メインじゃなくても、そこに近い役。
そういう所にキヤスティングしてたでしょ。
松本 何でお前知ってたよ。
最近無いし。
木村 ジョージさん、私はあなたのその歪んだ気持ちを理解できます。
なぜなら、私も歪んだストーカーだから。
松本 何を偉そうに言ってるの。
木村 ですが、あなたは間違ってる。
あなたが魅力的な人間になれば、松本さんは自ずとあなたの台詞を書きたくなるし、あなたは松本さんの書いた台詞を、より魅力的に表現する演技力を身に付けることに心血を注ぐべきだった。
安易に抱いてなどと言うべきではなかった。
なぜ、もつと真正面から芝居に、松本さんの台本に、向かい合わないんですか。
松本 正論だけだよ。
お前が言うべきことでもないよな。

所 しょうがないじゃないですか。
私には時間が無いんです。
私に残された時間は、あと僅かしかないんです。

木村 どういうことですか。

松本 何か、病気とかあるのか。

所 私、30歳までには結婚したいんです。
しかも、芸能人と。
野菜ソムリエの資格も欲しいし。
自宅に大きなキッチンを作って、そこで料理教室を開催して、カリスマ主婦的な存在になて、レシピ本も出したいんです。

松本 すごい野心だね。

所 ある程度、知名度が上がったら、南の島に移住して小麦色になって、今度は美のカリスマ的に言われて、エッセイなんかを出版して、小銭を稼ぎながら、ゆつたりと暮らしたいんです。
そのためには、少しでも早く良い役を貰って、色んな人に注目される必要があるんです。
私には、時間が無いんです。

松本 正直、ここまで正直に言われると、清々しきすら覚えるよ。
嫌いじゃないかも。

木村、松本の台詞間に腹に隠していた、拳銃を取り出す

34

木村 お前うるさい。(変なイントネーション)

s.p. 銃声

松本 ∴

所 倒れる

松本 ∴

木村 ∴

松本 何してんの。

木村 大丈夫です。

一番だけだから、近くの方は、何の音だったのか、気にもしません。

松本 そうい問題じゃねえよ。

お前、何してんだよ。

木村 銃で撃ちました。

松本 何で。

木村 ちよつとうるさいなつて。

もう良いかなつて。

松本　ちよつとうるさいなつて。
もう良いかなつて。

木村　はい。

松本　∴

木村　邪魔になつて。

松本　∴

お前何してんだよ。

木村、松本に銃を向ける

木村　松本さん、落ち着いてください。

松本　落ち着けるわけねえたら。

木村　大丈夫です。

すぐ落ち着きます。

ちよつと驚いてるだけです。

ゆつくりと息を吸つてください。

すぐに落ち着きます。

松本　救急車を呼ぼう。

木村　無駄です。

もう死んでます。

松本　それでも、救急車を呼ばせてくれ。

お願いだから、呼ばせてくれ。

木村　∴

松本　お願いします。

木村　駄目です。

ああ、別に僕、僕が捕まるとかは、そんなに気にしてないんで。

そういう意味で電話をさせないつてことじゃないですよ。

松本　∴

木村　その子は、もう死んでます。

時間の無駄です。

だって、その子の時間は、もう止まつてるんですから。

松本　∴

木村　僕、松本さんのファンです。

ストーカーじゃないですよ。

僕は、松本さんのファンなんです。

松本さんの作品が、大好きなんです。

松本　∴

木村　話しましょう。

松本　何でお前、そんなに落ち着いてられんだよ。

木村　話しましょう。

松本 話すことなんてないよ。
木村 新作、どんなの書くんですか。
松本 まだ決まってるよ。
木村 知ってます。
松本 ∴
木村 どんなの書くんですか、教えてくださいよ。
松本 だから、まだ決まってるんだって。
木村 ∴
松本 知ってるだろ。
全然書けてないの。
聞いてどうするんだよ。

木村、息遣いが荒くなる

松本、気味悪そうに木村を見ている

木村 すみません。
なんか、興奮しちゃって。
松本 何に。
木村 え、だって、もう書けるでしょ。
もう今、どんどん、どんどん松本さんの頭の中に、言葉が降って来てるでしょ。
松本 ∴

木村 それを教えてくださいって言ってるんですよ。
松本 何も降ってきてなんかいいよ。
この状況で、一体何を思いつて言うんだよ。

木村 そんなわけないでしょ。
この状況だからこそ、松本さんの頭の中には、今まさに言葉が降ってきてるはずですよ。
青天の空に、強い日差しと、決して止まない雨が入り乱れて、それが、あなたの中で、
言葉と言う物質に変わってるはずですよ。
だって、

そこで無意味に人が死んだんですから。
松本 ∴

狂ってるよ、お前。

木村 何ですか。
僕は、松本さんのファンなだけですよ。
松本さんの助けになりたいだけじゃないですか。
松本さん苦しんでるから、少しでも松本さんの助けになりたいだけなんですよ。
洗い物も、掃除も、松本さんが帰ったら、すぐに作品に取り掛かれるようにして。
それなのに、松本さん、いつもぐろぐろに酔っ払って帰ってきて、パソコンは立ち上げ
るのに、結局一行も書かないで、また酒飲んで寝ちやうんですもん。
だから僕、もつと、もつと松本さんのためになることをしないとつて。

松本 　　：

木村 　　どうですか。

　　　　　僕、お役に立ててますか。

松本 　　それでジョージ殺したの。

木村 　　誰でも良かったんですけどね。

　　　　　松本さんのためになるんだつたら、誰が死んでも良かったんですけどね。

松本 　　誰でも良かったつて。

　　　　　ジョージが死んだ意味は。

木村 　　そんなのありませんよ。

　　　　　あ、最初はですね。

　　　　　僕が、松本さんの前で死のうと思つてたんですよ。

　　　　　こうやつて話をしてる途中で、急にこうやつて（こめかみに銃を当てて）、ブンつて。

　　　　　そしたら、彼女、飲みに来ちやつたじゃないですか。

　　　　　なんか、色々予定狂つちやつて。

　　　　　まあ、大した計画は立ててなかつたんですけどね。

松本 　　ジョージが死んだ意味は。

木村 　　だから、そんなのありませんつて。

　　　　　松本さん、刺激が欲しかったでしょ。

　　　　　書けないのつて、刺激が足りてないつてことでしょ。

　　　　　俺はただ、松本さんに刺激を与えたかつたんですよ。

　　　　　でもあれじゃないですか、3人で話して、なんか、面白かつたじゃないですか。

　　　　　僕も楽しかつたんですけど。

　　　　　でも最後、彼女、夢の話してたじゃないですか。

　　　　　くだらねえ夢の話。

　　　　　叶はずもない、誰も興味もない、どうでもいい夢の話。

　　　　　ああ、良くないなつて。

　　　　　なんとなく思つたんですよ。

　　　　　良くない話してるなつて。

　　　　　だからもう、ここまできなつて。

　　　　　邪魔になつて。

松本 　　だから、ジョージが死んだ意味は。

木村 　　何回言わせるんですか。

　　　　　そんなのありませんつて。

松本 　　ふざけんなよ、お前。

　　　　　ふざけんなよ、お前。

　　　　　ふざけんなよ、お前。

　　　　　そんなのあつて良いわけないだろ。

　　　　　無意味な死なんてあつて良いわけないだろ。

　　　　　何で自分が死ぬのか。

何であなたが死ななければいけなかったのか。
何のために自分は死ぬのか。
何のためにあなたは死ななければいけなかったのか。
プランターの花たちに、話しかけながら水をやって、
足元でじやれてる猫に、勿体ぶりながら餌をあげて、
炊きあがる米の匂いに母親を思い出して、
みそ汁の火加減を気にする。
新聞を広げて父親を思い出して、
みそ汁をすする。
それで良いじゃない。
それが良いじゃない。
一瞬の間に、何も残すことも叶わず、
一人、誰一人自分の事を知らない場所で、
死の予感も感ずることもなく、ただ明日の事だけを考へてる中で、
何の尊厳もない死なんて、あつて良いわけないだろ。
何の尊厳もない死なんて、あつて良いわけないんだよ。
ふざけんなよお前。
お前が死ぬよ。
この世に生きてる以上、誰一人、意味のない死なんて存在しちゃいけないんだよ。
意味なく人の命を扱つて良い理由なんて無いんだよ。

木村

：

違つてしょ。
松本さん、そんな人じゃないですか。

松本

俺はこんな人間だよ。

木村

違いますよ。
どうしたんですか。
人は壊れるんですよ。
そうでしょ。
精神が先か、肉体が先か。
そんなことは問題じゃない。
人は単に壊れるんです。
壊れる時が死ぬときです。
そこには不平等と理不尽が渦巻いて、人はその渦には抗えない。
そうでしょ。
あなた、そんな作品、いっぱい書いてきたでしょ。
誰かを思えば思うほど、その思いは届かなくて、
誰かを信じれば信じるほど、その気持ちは、予想外の角度から切り刻まれる。
いつの間にか、身も心もぼろぼろになつて、
いつの間にか、人を傷つけて、
いつの間にか、壊れていく。

そらでしょ。

それが松本さん、あなたの作品でしょ。

松本

違う。

木村

違わない。

松本

違う違う違う違う。

木村

::

松本

::

木村

自分の作品を捨てるんですか。

こんなにもあなたの作品を、好きだつて言ってる人がいるのに

あなたは、あなたの作品たちを捨てるってことですか。

あれは単に、あなたの膿で、その膿を、まるでキリストの血のように、僕たちに与えて

いたとでもいうんですか。

松本

やめる。

確かにそんな作品を書いたかもしれない。

別に作品を否定する気はないよ。

膿だなんて思ったこともない。

でも、俺はそんな人間じゃない。

木村

良いじゃないですか。

僕は、あなたのその傷口から出てくる膿を飲みたいんですよ。

あなたの化膿した傷口を舐め回したいんですよ。

松本

やめる。

松本、吐き気をもよおす

ゴミ箱に吐く

木村

最近の松本さんの作品、僕好きじゃないんですよ。

さつき言ってた、尊厳みたいなこと。正しいこと。

そんなの松本さんじゃないですよ。

誰にそそのかされてるんですか。

だって、いま彼女いないでしょ。

あ、それが。

結構ストレス、彼女にぶちまけてましたもんね。

殴ったりとか。

素敵でした。

女が変わる度に、それまでと違った新たな世界が生まれてましたね。

それは、あなたの傷だ。

その傷を俺は待ってる。

::

じゃあ、そいつ殺してもしやあないですよ。

そいつが死んだくらいじゃ、松本さんは傷つかない。

でも、最近の、正しくあろうとする松本さんには十分だと思っただけだなあ。
やっぱり足りないのか。

松本 俺を殺してくれよ。

木村 ∴

駄目ですよ。

松本さんが死んだら、僕の大好きな松本さんの作品が読めなくなるじゃないですか。

松本 もう書けないんだよ。

何も浮かばないんだよ。

言葉なんて降ってこないんだよ。

最初から降って来てなんかなかったんだよ。

カラスが生こみを漁るように、腐った言葉を掻き集めてただけなんだよ。

空っぽなんだよ。

作家としての俺は、最初から空っぽなんだよ。

木村 そんなことありませんよ。

松本 俺を殺してくれよ。

松本、木村の方に歩いていく。

自分の額に木村の銃を当てる

木村 落ち着いてくださいよ。

松本 落ち着いてるよ。

だって、俺はもう書けないんだから。

生きててもしょうがない。

木村 書けますよ。

松本 書けないよ。

木村 書けますよ。

松本 書けないよ。

木村 書けますよ。

松本 書けないんだよ。

木村 書けますよ。

松本 書けない(んだよ)

木村 書けます。(変なイントネーション)

松本 ∴

木村 ∴

松本 教えてくれよ。

俺は何を書けば良いんだよ。

木村 エビって美味しいですよ。

コオロギの味がするんですよ。

それが、僕のお母さんの思い出です。

いつも一人でした。

それが、僕のお母さんの思い出です。
何度も何度も、頭の中で、お母さんを殺しました。
何度も何度も、頭の中で、沢山の人を殺してきました。
初めてエビを食べた時ね、吐いたんですよ。
昔、食ったコオロギやバッタや、何だかわからない幼虫や、自分の惨めさを象徴する味がして、吐いたんです。
周りの人が、甲殻類アレルギーなんだねって言うてくれました。
その優しさにも吐き気がしました。
僕のアレルギーは、甲殻類なんかじゃないんだよ。
僕のアレルギーは、お前らなんだよ。
：
あなたの闇は光を食いちぎるんです。獯猛に、残酷に。
気持ちよかった。
理不尽で、身勝手に。
常に何かに怒っていて。
常に何かを憎んでいて。

：
それが、あなたです。
松本 違う。

松本の「違う」の台詞間に、木村、松本を前蹴り
松本、吹っ飛ばす
木村、銃口を自分のこめかみに当てる。満面の笑み

松本 違う。
：
やめる。

木村、引鉄を引く
s.e. 銃声

松本 違う違う違う違う。
違うんだよ。
もう俺は、そんなんじゃないんだよ。
3年位前かな。
昔の女から絵葉書が届いたんだ。
ずっと連絡は取ってなかったし、その時はもう、すっかり何の関係もなかった。
突然、絵葉書が届いたんだ。
今の世の中に、絵葉書ってって思った。
何かの災害の被災地でボランティア活動をしてるって書いてあった。

協力お願いしますって中身だった。
彼女の、真っ黒に日に焼けた、健康的な笑顔が、心を打ったよ。
ああ、幸せそうだって。
幸せがどんなものなのかは分からない。
でも、これが幸せつものなかって、俺は思ったよ。
そして、それは、俺といた時には見たことが無い顔だった。
思い出したんだ。
彼女の言葉を。
彼女も俺の作品を愛してくれた。
同時に俺の事も愛してくれてた。
ある時彼女は言ったんだ。
ずっと、そんなに身を削って書いていくの。
飲んでるときの他愛のない会話だったけど、妙に耳に残ってた。
あなたの心は、もつと普通に、笑いたがってるんじゃないの。
あなたも、あなたの作品も、もつと笑っていいんじゃないの。
何を言ってるのかと思ったよ。
そんなことできるわけないだろ。
誰も望んでないんだから。
多分、俺はそう答えたと思う。
彼女が、何て言ったかは覚えていない。
絵葉書が届いてから2ヶ月後、彼女が死んだ
単純に、ボランティア中の事故で死んだんだそうだ。
そこに悪意なんてものは存在しない、ただただ悲しい死だ。
俺は、心をどこに置いて良いか分からずに、夜の街をさまよっていたと思う。
月の綺麗な夜だった。
妙に月の光が強くてね。街灯の細い影が道路に伸びていて、俺の影の胸の辺りを突き刺しているように見えたよ。
実際に何か、俺の胸は突き刺されていたようだった。
そう、彼女の言葉が、俺の胸を突き刺していたんだ。
その時から、俺は何を書いて良いのか分からなくなった。
確かにそうだった。
怒り、憎しみ、社会に対するアンチテーゼ、そんなもの、ずっと前に無くしてるよ。
当たり前じゃん。
何歳だよ。
そこそこ満ち足りた生活をしながら、そんなの同時に持ち合わせていられるわけないだろ。
：
あなたはもつと楽しい人だと思うけど。
あなたは人を笑わせるのも得意だし、あなたの笑顔はとつてもチャarmingだと思う。
何より、あなたの心は笑いたがってる。

いつまでも心を削って書き続けることはできない。
誰かのために書いてみるのも良いんじゃない。
誰かの笑顔のために書いてみても良いんじゃない。
そうだ、彼女はそう言ったんだ。
缶チューハイを飲みながら、彼女は俺にそういった。
そして、あの絵葉書の彼女の笑顔を、俺は俺の文章で与えてみたかった。
：
無理だよ。
無理だよ、無理だよ、無理だよ。
そんなの無理だよ。
そんな人間じゃないんだよ、俺は。
今日だって、そうだ。
あんなくだらない話しかできない俺に、そんな文章が書けるはずがない。
何が哲学だ。何があた名だ。何がキャバクラシンдрームだ。
全部くだらない。
何の中身もない。
俺はそんなくだらない、くそみてえな話しかできねえんだよ。
そんな俺に何が書ける。
：
もうさ、何を書いて良いか分からないんだよ。
お前らが死んだんじゃない。
今日ここで死んだのは、俺だ。

松本、乾いた笑い

松本 本当だ。
俺、笑いたがってるわ。

音楽
照明、暗転
音楽、カットアウト

舞台上、松本がソファに座って、PCを立ち上げる（モニターの明かり）
照明、舞台全体

松本、文章をタイピングしている。
s.e. ピンポーン

松本 ジョージ、鍵開いてるから、勝手に入ってるい。

袖から

所 お邪魔します。
木村 僕も来ちゃいました。

暗転
幕楽

了